整備事例 1

歴史と環境をテーマに安心して楽しめる里海公園づくり（金沢区）

～水辺のウッドデッキが地域の新たな舞台へと

水辺に向かって設置されたウッドデッキ

並木団地の真ん中にある「ふなだまり」は、池のように見えますが、海につながっている入江です。そこにあるウッドデッキでは親子がお弁当を食べたり、おしゃべりをしたり、みんなが思い思いに過ごしています。人を引き付ける気持ちの良いこの「ふなだまり」は、富岡八幡宮の祇園舟神事を行う非常に由緒ある場所でもあります。しかし、地形的に海と住宅地から流れてくるごみが溜まりやすく、以前は大人が子どもたちに「汚くて、危険だから近寄ってはダメ」と言うような場でした。

並木団地に建設当初（昭和40年代）から住む高島さんは、定期的に水辺のごみ拾いをしていましたが、水面に浮かぶごみの回収は難しく、限界を感じていました。そんなある日、SUP（サップ）※1で水面のごみ拾いをしている人を見かけます。それが富岡に住む赤澤さんでした。彼らは「ふなだまり」をもっと面白い場にしたいと意気投合し、「富岡・並木ふなだまりgionbune公園愛護会」を結成します。「陸と海を同時に清掃しないと、この公園はきれいにならない」と考え、自転車やSUPを使って楽しみながら新しいスタイルの清掃活動を始めました。

近隣の小学生にふなだまりについてレクチャー。デッキが青空教室に

40代の赤澤さんはアイデアマンで、「ふなだまりをもっとアピールするには拠点が必要だ」と、地域のボート小屋を改修するために、ヨコハマ市民まち普請事業に応募することを提案します。高島さんやメンバーの松尾さんたちは、そんな赤澤さんと周りの若い世代の熱意に押され、まち普請へ挑戦することを決めました。

無事に一次コンテストは通過したものの、権利上の問題によりボート小屋を使用することができなくなってしまいますが、諦めずに、水辺にウッドデッキをつくる内容に提案を練り直しました。整備場所は変わりましたが、水辺の価値を高めることが評価され、見事二次コンテストを通過することができました。

しかし、いざ整備を始めようとした矢先、中心メンバーの赤澤さんが急逝されます。メンバーは大変ショックを受け、一時は整備をやめることも検討しますが、高島さん、松尾さんが中心となり赤澤さんの遺志を継ぐことを決意し、なんとか令和2年2月にウッドデッキを完成させることができました。

コロナ禍により予定していたイベントはすべて中止となり、積極的なPRができませんでしたが、ウッドデッキを利用する人たちは徐々に増えています。ふらっと立ち寄る人以外にも、ヨガで使われたり、フラダンスグループが練習したり、小学生の野外教室など様々な使い道が生まれています。最近ではテレビ番組のロケ地となったり、アートグループから「イベントをしたい」という申し込みがあるなど、想像していなかった幅広い人たちに知られるようになってきました。ウッドデッキがふなだまりの良さを引き出し始めています。

愛護会メンバーで並木団地で育った二見さんは、並木団地には様々な特技や知識のある面白い人がたくさんいるのに、その人たちと交流する機会がないことをもったいないと感じていました。それが、ウッドデッキという舞台ができたことで、地域の活動が次第に見えてきたのです。「これまで新陳代謝ができなかったけど、ウッドデッキによって地域に意識が向いた人たちと『この町に住んでよかったな』と思う企画をやっていきたい」。二見さんの言葉には、夢と可能性があふれています。

高島さん、松尾さんは「とりあえず、5年間はやってみますよ」と若い世代をバックアップする気持ちです。「水辺はパワーがある。だからどう利用するかを考える人たちと共にまちをつくっていきたい。それを可能にしてくれたのは、まち普請だと思います」とまちの未来を見つめています。

苦労があったからこそ光が見えてきた。ふなだまりの今後に注目しましょう。

※1：「Stand Up Paddleboard（スタンドアップパドルボード）」の略称。ボードの上に立ち、パドルを使って水面を漕いで進んでいくウォーターアクティビティ。

日常的に太極拳やフラダンスの練習場所にもなっている

歴史と環境をテーマに安心して楽しめる里海公園づくり（金沢区）

整備主体…富岡並木ふなだまりgionbune公園愛護会
整備場所…金沢区富岡東4丁目13番
富岡並木ふなだまり公園内
整備内容…ウッドデッキ
竣工時期…令和2年2月

整備事例 2

鶴見の多文化・多世代の共創拠点づくりまちのリビング（鶴見区）

～地域に循環を生み出す230cafe（つみれカフェ）

鶴見駅周辺は喫茶店や居酒屋が多く、賑わいのある街ですが、日中に市民が活動できる集いの場が多くありません。鶴見駅西口には平成22年にまち普請で整備された「鶴見ふれあい館（令和2年9月閉館）」がありましたが、東口には公共施設を除きそのような施設がなく、つみれプロジェクト実行委員会の須田さんは「多世代で気軽に集まれる場所があるといい」と考えていました。

座敷もあり乳幼児連れでも使いやすい。
小箱ショップも併設し特産品の委託販売も行なっている

平成29年に須田さんは地域の子育てママ支援グループと一緒に、地域の拠点づくりを目的にまち普請に応募しました。一次コンテストを通過しましたが、鶴見駅周辺は家賃が高額で最終的に条件に合う物件が見つからずに辞退することになってしまいました。その後、まち普請の応募をあきらめていましたが、これまでの活動でつながったビルのオーナーから「アパートをビルに建て替えるけど、2階のフロアで活動してみない?」と声をかけられます。「これを逃がせば、次のチャンスはない!」と考えた須田さんは再度まち普請に挑戦することを決めました。

しかし、以前一緒にまち普請に応募したグループは他の活動を始めていたので、新しくメンバーを集めることになりました。鶴見区で外国人の子育て支援の仕事をしていた福徳さんは、

ご自身も近くに親や親せきがいない中での子育てに孤独を感じ、色々な人たちとつながりたいと思っていました。二人は商店街のイベントで知り合ったのですが、須田さんが拠点を整備しようと動いていることを知った福徳さんも、活動に参加するようになりました。そうやって集まったメンバーで立ち上がったのが、つみれ(つるみのみらいをつくる れんけい)プロジェクト実行委員会です。

二次コンテストでは、過去にまち普請で提案した「孤立した子育て・ひとりぼっちの子どもをなくす」という内容に、多様な国の人が住み、身の回りが多彩な国の文化で溢れているという鶴見の魅力を加えて提案しました。その後、二次コンテストに向けて地域との連携や近隣商店街での街頭インタビューを積極的に行い、メンバーが一丸となって提案内容を深めていったことで、見事二次コンテストも通過します。しかし、通過した後に待ち受けていたのが、活動の担い手の離脱です。一緒に活動をしていた若いメンバーが就職したり、別の活動を始めてしまったことで、須田さんと福徳さんは再度、一緒に活動するメンバーを探すことになりました。ビルが建設され、実際に整備に動き出すまでの期間を利用して、関わってくれる人を再び集め、整備計画や事業運営を急ピッチで検討し、遂に令和2年3月に230cafeは完成を迎えました。

DIYワークショップの様子。子どもも参加して棚などを手作りした

ところが、カフェのオープンを目前にして、新型コロナウイルスの感染拡大が本格化します。カフェのテーブルなどを手作りするワークショップは開催できましたが、その後は全くイベントができなくなり、当初予定していた事業も見合わせることになりました。どうやってカフェを維持していけばいいのか、二人は頭を抱えます。

そんな活動ができない中でも、230cafeを地域貢献の活動拠点として活用することになっていたパルシステム神奈川ゆめコープがカフェの維持に協力してくれました。その他にも地域の企業との連携や、協賛という形での応援も生まれています。また、「横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業」(通称、サービスB)※2も実施することで、地域の民生委員さんが足しげくやってきて、カフェを宣伝してくれています。西口にあった鶴見ふれあい館を利用していた高齢者も230cafeに来てくれるようになりました。色々な人たちが、230cafeを介してつながり始めています。

酵素講座の様子。地域の起業家の利用も増えており、応援し合う関係になっている

230cafeは何かを始めたい人に場所の提供もしています。ビルの前に掲げていた看板を見て、「酵素づくり」で起業した人が酵素の講座を始めました。その姿を見て、230cafeを使いたいという声が他にも寄せられています。地域に拠点ができ、実際に使われることで自分の可能性を見つけることができる、そんな良い循環が生まれ、230cafeから新しい風が吹き始めています。

「アイデアはどんどんたまっている。動けるようになったら、色々と仕掛けていきたい」と語るお二人。230cafeが今後どんな風を吹かせてくれるのか、期待が高まります。

※2:ボランティアを始めとした地域住民が、要支援者等を対象とした介護予防・生活支援の活動を行う場合に、その活動に係る費用に対して、補助金を交付する制度。

鶴見の多文化・多世代の共創拠点づくり
まちのリビング(鶴見区)

整備主体…つみれプロジェクト実行委員会
整備場所…鶴見区鶴見中央4丁目7-15-201
整備内容…コミュニティカフェのキッチン等設備および内装
竣工時期…令和2年3月

整備事例 3

世代を超えた集いの場にするための拠点づくり(南区)

~子どもと高齢者が交流する日常「おもいやりハウス」

一見普通の住宅に見えるが、手すりの看板やクレープ販売のカウンターが内と外の距離感を縮めている

南区中村町で子育てサークルの活動をしていた津ノ井さん、根島さん、吉永さんは、近隣のケアプラザで開催したイベントで高齢者にグッズを作ってもらったり、子どもたちが高齢者とふれあう姿を見て、多世代がつながる面白さを感じていました。そして、イベントの時だけではなく、日常的に子どもと高齢者が交流できる場があればと考えるようになりました。「子育てにはお金も必要!子育てを優先しつつ、地域を見守り働ける場所がほしい。地域にないなら自分たちでつくろう!」とおもいやり隊を結成します。

中村町周辺は坂が多く、高齢化も進んでいて、買い物に困っている人が多くいます。「そういう人たちのために販売会をやってみたら?」というアドバイスを受け、買い物難民が多い坂の上の地区で平成30年2月から、定期的に野菜やパンを販売するマルシェを始めました。利用者も多く、「もっと色々な商品がほしい」という声を受け、買い物代行も始めます。活動が軌道に乗ると「地域住民の交流拠点が欲しい」という思いが強くなっていきました。そんな時に、地域ケアプラザで行われた勉強会でまち普請を知り、「私たちにぴったりの制度だ!」と、すぐに応募することを決めます。

多世代が集う「銭湯」でマルシェを行うことで、地域のつながりを豊かにするというアイデアは二次コンテストを通過しますが、計画が具体化する中で様々な課題が顕在化し、別の場所を探すことになりました。地域の空き家を探し回り新たに見つけた場所も、検討を進める中で断念せざるを得なくなります。ほぼ諦めかけていたところ、地域の人の協力もあり、二次コンテストの直前にようやく場所が見つかりました。

改修もできるところは自分たちの手で行った

しかし、やっとの思いで見つけた空き家は耐震性に問題がありました。そこで耐震工事の資金を集めるために、おもいやり隊はクラウドファンディング※3にチャレンジします。ちょうど横浜市が、地域まちづくり活動を対象としたクラウドファンディングの活用支援事業(試行)を立ち上げたタイミングで、その第1号として支援を受けることが決まりました。当初は資金が集まるか不安もありましたが、銀行からの融資や他の助成金を申請する計画も合わせて提案し、無事二次コンテストを通過することができました。

地元からの寄付やクラウドファンディングで耐震工事の資金を集め、さらに人伝てで大工さんや電気屋さんに個別に掛けあい、メンバーも工事に参加するなど、何とか整備費用を抑えました。そんな苦労を乗り越え、令和元年10月に多世代交流拠点「おもいやりハウス」が完成します。

おもいやりハウスでは、「横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業」(通称、サービスB)で高齢者向けのサービスを提供したり、お弁当や駄菓子の販売を行い、大人も子どもも気軽に立ち寄れる工夫をしています。友達のお母さんが運営しているという安心感から、放課後は多くの子どもたちが集まる居場所になり始めていました。

しかし、日常的に高齢者と子どもが交流する理想の場所が出来上がった矢先に、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、おもいやりハウスは令和2年4月から2か月間休業することになります。「二次コンテストからおもいやりハウスのオープンを挟んでずっと走りつづけてきた。2カ月間休業し立ち止まったことで、おもいやりハウスが地域に何を生み出せるのか改めて考えるきっかけになった」と津ノ井さんたちは教えてくれました。コロナ禍が続く中、お弁当の販売から活動を再開して、さらにフードパントリー※4を始めるなど、こんな時だからこそ必要な取組を行っています。